

# 北海道芸術学会

## 第44回例会

2025年3月23(日)  
17時45分～20時30分

会場  
札幌市民交流プラザ SCARTS コート  
(札幌市中央区北1条西1丁目)

「Wakka」(2023年/40分、製作・脚本・編集・監督/中島洋)

### 【研究発表】

研究発表1 17時45分～18時20分

「山を築くー「レジャー環境の彫刻」としてのイサム・ノグチ《モエレ沼公園》」

児玉哲明 (北海道芸術学会員、20世紀アメリカ美術研究者)

研究発表2 18時20分～18時55分

「台湾／甲子園／北海道

ー『KANO 1931 海の向こうの甲子園』についてのポストコロニアル批評の試みー」

大石和久 (北海学園大学)

### 【特別プログラム】

特別プログラム 映画「Wakka」(中島洋監督、2023年)の上映とアフタートーク

19時10分～20時30分 ※上映40分+トーク40分程度

中島洋 (映像作家、美術家、シアターキノ代表)

古家昌伸 (北海道芸術文化アーカイヴセンター代表)

マユンキキ (アーティスト)

山田のぞみ (札幌芸術の森美術館学芸員)

入場無料

どなたでもご参加いただけます  
当日直接会場にお越し下さい

本例会はオンライン配信を行いません。  
映画上映中の人退場はお断りいたします。  
研究発表、アフタートークは出入り自由です。

お問い合わせ

〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目

北海道大学文学研究院 芸術学研究室 (北海道芸術学会事務局)

Mail no\_imamura@let.hokudai.ac.jp

TEL 011-706-3912 (本件担当: 今村信隆)



北海道芸術学会  
Hokkaido Art Society

## 「レジャー環境の彫刻」としてのイサム・ノグチ《モエレ沼公園》

児玉哲明

北海道芸術学会員、20世紀アメリカ美術研究者

モエレ沼公園（札幌市）は、日系アメリカ人彫刻家イサム・ノグチが死去直前に基本設計を完成し、ノグチ財団監修のもとで建設された。彼は「この庭全体が一つの彫刻」と語っており、プレイグラウンド（遊び場）シリーズの公共芸術空間、と発表者はとらえる。公園は《モエレ山》と《プレイマウンテン》を注視点（フォーカル・ポイント）に構成される。この二つの築山は、1930年代に制作したが実現しなかった《鋤のモニュメント》と《遊び山》を想起させる。《鋤のモニュメント》はアメリカ中西部に構想した開拓記念碑であった。ノグチは《遊び山》について、このアメリカ開拓記念碑を「私が暮らす都市に持ち込みたかった」と述べている。現地視察直後、札幌を「新しい都市のあり方を模索している街」と語ったニューヨーク講演などを手ががりに、《モエレ山》と《プレイマウンテン》の解釈を試みる。《モエレ沼公園》は、社交の場でもあった大名庭園の現代化との考察も論じる。

## 台湾／甲子園／北海道

### — 『KANO 1931 海の向こうの甲子園』 についてのポストコロニアル批評の試み—

大石和久

北海学園大学

本発表は、台湾ポストニューシネマの旗手、魏徳聖が製作に携わった台湾映画『KANO 1931 海の向こうの甲子園』（2014年、馬志翔監督、以下『KANO』）を、ポストコロニアルの観点から批評する試みである。台湾が日本統治下にあった1931年、嘉義農林学校（以下、嘉農）は台湾代表として甲子園に出場し、準優勝を果たす。嘉農野球部は当時、台湾でも珍しかった「蕃人」「漢人」「日本人」から成る三民族の混成チームであった。『KANO』は、この実話を基にした劇映画である。本発表では、ポストコロニアルの重要な思想家の一人、ホミ・バーバの理論を参照したい。バーバの観点に立てば、嘉農の球児たちは、宗主国・日本へ愛憎半ばする「アンビヴァレンス（両価性）」を抱きながら、日本野球を「擬態＝模倣 mimicry」していたと考えられる。また、本発表では、嘉農のライバルである北海道代表の札幌商業学校のピッチャー、錠者博美の存在にも注目したい。彼は、嘉農野球部に深い共感を寄せる重要な人物として登場する。この錠者というキャラクターに注目することで、魏徳聖が北海道と台湾の間に、植民地としての相似性を設定していたことにも論及してゆきたい。

## 特別プログラム

### 映画「Wakka」（中島洋氏監督、2023年）の上映とアフタートーク

#### 「大地に水を建てる」 中島洋

表現活動を始めた20代の時から、水、水道管、窓、身体、記憶、メディアといったものに関心を持ち続けていた。人類が破壊した自然からの逆襲にも思えるパンデミックを体験した私たちは、テクノロジーと人類の共存という永遠のテーマに、文化でどう関わることができるのか。

水道管の蛇口をひねることができない困難さを生きる人間の、<水>のジェネシス（起源）を探り、川の近くで暮らしを始めた先人への想いを探る旅は、死者と共に生きることに基づき、生命の起源にも辿り着くことができたのだろうか。

「Wakka」から2年、人間中心主義への問いかけは、生死を越えて循環する連絡通路をどのように持つのかと思索している。

#### ★アフタートーク登壇者

中島洋（映像作家、美術家、シアターキノ代表）  
古家昌伸（北海道芸術文化アーカイヴセンター代表）  
マユンキキ（アーティスト）  
山田のぞみ（札幌芸術の森美術館学芸員）



#### ★「Wakka」（2023年/40分）

出演 / 平原慎太郎、結城幸司、大森弥子  
製作・脚本・編集・監督 / 中島洋  
制作 / 麻生榮一  
撮影監督 / 露口啓二  
録音 / 藤川貴広  
サウンドデザイン / 大友良英  
助成 / 札幌市映像制作助成事業